

20 西洋医学所医師添田玄春の長崎留学

深瀬泰 且

江戸の西洋医学所に勤務する寄合医師添田玄春が長崎に留学したことは、玄春の日記をはじめとして、緒方洪庵の書簡や『勤仕向日記』にもみえるところである。これらの史料にもとづいて、玄春の長崎留学について報告する。

西洋医学所から明日御用の義があるので出頭するようにとの達しが、玄春のもとに届いたのは文久三年（一八六三）正月六日の夜のことであった。翌七日医学所に出頭したところ長崎における医学伝習の指示があつて、八日四ツ刻にお城へ出頭するようにとの命をうけた。

この日玄春は登城して金二〇両を支給され、各所にいとまごいをすませたのち、同月二〇日に長崎留学の朱印状をうけた。この際に支給されたお暇金は、その前年に長崎留学を命ぜられた緒方洪哉（のちの惟進）や竹内玄庵

（のちの正信）のお暇金四〇両、合力米一五〇俵に比すると、著しく低額であるといわざるをえない。かれらが奥医師の倅であつたからであらうか。

玄春は正月二〇日に「先触れ」をだして準備をととのえた。その夜緒方洪庵が玄春宅を訪問して壮途を祝してくれた。翌二一日の朝、玄春はおおくの親戚縁者に見送られて江戸を出立した。この日、空は晴れ上がって、幸先よい旅日和であつた。新八、きくなどの使用人は芝口まで、藤井玄洋、又四郎、秀次郎は品川まで見送りに出た。玄春の妻奇勢子の実家筋にあたる江沢新兵衛は、神奈川まで見送つて別れをおしんだ。奥の細道の旅にのぞんだ松尾芭蕉を見送つて、別れをおしんだ弟子たちの姿を彷彿とさせる光景である。

二月七日づけの大坂からの書簡が留守宅にとどき、二月九日に玄春は長崎に到着した。およそ一ヶ月の旅程であつた。

門出に先立つて玄春は弟子の藤井玄洋を留守中の代診医に指名した。それをうけてそのころの官医は法体になつたという慣習にしたがつて、玄洋は剃髪した。幕府医官

添田氏の代診としての威儀を正している様子がうかがえる。

玄春の長崎における医学伝習の状況について記録した文書は披見する機会がない。このころの長崎の状況から推測すると、ポンペ帰国後の後任として医学所で教鞭をとっていたボードインに教えをうけたものと思われる。

このころの長崎養生所は、松本良順の後任として頭取に就任していた戸塚文海はその人柄から生徒の輿望をうしなつて排斥され、校内は收拾つかない状況におちいつていたので、これを治めるとの任務をになつて松本良順が長崎に乗りこむという状態であつた。これを見ると玄春が長崎に到着した二月、三月ごろは、落ちついて学問に専念できるような状況でなかつたかもしれない。

さらに生麦事件の煽りをうけてイギリスとの関係が険悪となり、ボードインや伝習生たちに帰国の布達がだされているので、玄春ははたして留学の目的を充分に達成できたであろうか。玄春の江戸帰府は六月二三日なので、留学期間は五ヶ月ほどであるが、往復に二ヶ月を要した事実から、長崎滞在はおよそ三ヶ月といふかなりの短時

日であつた。

玄春以後の上領玄碩や坂上池院は長崎伝習の願書は提出したものの、時節柄派遣見合わせとなつたので、玄春が長崎留学の望みが叶えられたのは幸運であつたといつてよいであろう。しかし留学期間がこのような短期間におつたのは、攘夷の実行をせまられた幕府の決定にもとづく伝習生帰国の布達によるものと思われる。

(順天堂大学医学部医史学研究室)